

社会臨床ニュース

第 66 号

2008 年 2 月 24 日

発行◆日本社会臨床学会

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

茨城大学教育学部情報文化教室林研究室

EMail: shakai.rinsho@gmail.com Web: <http://sharin.jp>

郵便振替: 00170-9-707357 銀行: みずほ銀行東陽町支店(普通) 8013029

合宿学習会… …「シリーズ社会臨床の視界」出版… …第 16 回総会……みんな大切!

三輪寿二(日本社会臨床学会運営委員長)

2007 年の合宿学習会は、年末になったのですが、12 月 8 日(土)、9 日(日)に神奈川県三浦市のマホロバマイズ三浦で行いました。20 名の参加でした。1 日目は、健康不安をテーマにして、医療現場から山田真さんに、また、近年の「食育アピール」について梶原公子さんから話題提供を受けました。病気にかからないことを求める健康強迫、食と栄養を通じての健康保持が叫ばれる社会状況の問題点や諸課題が議論され、これらを次回総会につなげていくことにしました。この学習会については、『社会臨床雑誌』16 巻 1 号で報告しますのでお読みいただきながら、総会への足がかりにして頂ければ、と思います。

そして、三年余をかけた学会編によるシリーズ「社会臨床の視界」(全 4 巻)がいよいよ出版の運びとなります。2008 年 2 月に第三巻『「新優生学」時代の生老病死』と第四巻『心理主義化する社会』が、3 月に第一巻『「教育改革」と労働のいま』と第二巻『精神科医療 治療・生活・社会』が刊行される予定です。これまでの社会臨床学会の議論を踏まえながら、現在わたしたちが何を捉えなくてはならないのか、さらに今後どのように展望していくかを、教育、医療、福祉の分野を通じて、いや、いまわたしたちが生きているこの社会の諸相を通じて縦横に切開し、「社会臨床」という言葉と視座から見えてくる視界を最大限に開いてみたつもりです。早くから論考を寄せていただいた執筆者を待たせてしまい、また他の執筆者には急かし続けて負担をかけながら論考を寄せていただき、そして出版を快諾していただいた現代書館にはそうしたモタモタした動きの中で多大の迷惑をかけながら、粘り強いご配慮を頂きました。まさに、たくさんの人たちの共同の作品群です。ご協力いただいた皆様に感謝の意を表したい気持ちで一杯です。ぜひに、お読みいただき、また、多くの方たちに宣伝していただけたら、と思います。本号に現代書館代表の菊池泰博さんの言葉を頂きながらのシリーズ本の紹介が掲載されていますので、ご覧ください。

合宿学習会のテーマを受けながら、そしてシリーズ「社会臨床の視界」(全 4 巻)の刊行を記念

しながら、日本社会臨床学会第16回総会を2008年6月14日(土)・15日(日)に、東京都八王子市にある八王子セミナーハウスで開きます。二つのシンポジウムと記念講演があります。その案内が以下にありますので、こちらもぜひお読みください。今回の総会は、従来と異なり、事前のお申し込み・ご連絡を頂く必要がある場合があります。そのための案内が掲載されていますので、総会参加のご予定とイメージをつくっていただき、周囲の方々もお誘いいただきながら、お申し込みをお待ちしています。

この間、いろいろと企画し、実行し、「反省し」、企画し、実行し、「反省し」の繰り返しです。運営委員もいささか疲れ気味といったところでしょうか。会員の皆様のご協力を得ながら総会まで頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

日本社会臨床学会第16回総会 ～『社会臨床の視界』(全4巻)刊行を記念して～ のご案内(第1報)

日本社会臨床学会運営委員長 三輪寿二

日本社会臨床学会第16回総会実行委員長 林延哉

日本社会臨床学会第16回総会を2008年6月14日(土)・15日(日)の両日にわたって、八王子セミナーハウスにて開催します。今号では第16回総会の概要をお伝えします。詳細は次号にてご連絡いたします。

日本社会臨床学会総会は、会員・非会員を問わずどなたでもご参加いただけます。お近くの方をお誘い合わせの上、多くの皆さんが参加してくださることを期待しています。

なお、今回の会場となる八王子セミナーハウスは、宿泊可能な研修施設です。最寄り駅から30分以内の距離ですので、もちろん当日日帰りでの参加も十分可能ですが、プログラムをご覧頂くとおわかりのように、14日の夕方には記念講演を、夜には交流会も設定しています。よろしければ現地にてお泊まりいただき、6月の週末の一日、情報交換や議論に共に時間を過ごすのも一興かと思います。宿泊の御案内も掲載させていただきましたので、こちらの方も是非ご覧下さい。

日時：2008年6月14日(土)・15日(日)

場所：財団法人大学セミナーハウス 八王子セミナーハウス

所在地：東京都八王子市下柚木1987-1

アクセス：JR八王子駅からバス(南大沢駅行または由木折返場行・所要時間25分)、または京王線北野駅からバス(平山城址公園行または南大沢駅行・所要時間15分)、または京王相模原線南大沢駅からバス(北野駅北口行または八王子駅南口行・所要時間30分)で、いずれも「野猿峠」下車。すぐ近くにセミナーハウスの看板と入り口が見える(バス停から徒歩5分程度)。

Tel: 042-676-8511(代表) e-mail: info@seminarhouse.or.jp

HP: <http://www.seminarhouse.or.jp/index.htm>

参加費：2000円(14日夜の交流会参加費は別途3500円となります)

日程およびプログラム：

6月14日（土）

11:00 受付開始

11:30 ～ 12:30 定期総会

13:30 ～ 17:30

シンポジウムⅠ「健康不安」を捉えなおす～食育・健康増進・禁煙から～

話題提供者

山田真(八王子中央診療所)・高橋久仁子(群馬大学)・八木晃介(花園大学)

司会

中島浩壽(学会運営委員)・梶原公子(学会運営委員)

昨年12月8日に『健康不安』の背景を探る～健康増進法・食育基本法を中心に～をテーマに学習会を持ちました。ここではなぜこれほど「健康」が問題にされるのか、誰が問題にするのか、それは私たちの生活にどのような影響を及ぼしているのかという問題意識のもと、「食育」という、私たちの学会では初めての切り口を交えて話し合いを持ちました。そのなかで「食育」が登場した背景には新自由主義や新保守主義の台頭が関係し、国家が個人の(食)生活、習慣、心理、健康、身体に強い関心を持ち、ここに焦点を当てて〈健全〉な食生活と健康増進を図っている動きのあることなどを確認しました。このシンポジウムでは、この学習会での話し合いをもとに健康幻想や健康不安の作られ方や語られ方、そこでの問題点について、シンポジストの方々独自の視点から話していただきます。

山田真さんには予防接種や健康診断の必要性やその功罪あるいは健康増進という視点から、高橋久仁子さんには「食育」が実践されている実態やそれが果たしている役割、またフードファディズム(食べ物が健康や病気に与える影響を過大/過小に評価したり、むやみに信じ込んでしまうこと)について、八木晃介さんには禁煙をめぐる言説の分析を通して、人々をさらなる健康幻想へと追い込んでいく昨今の状況について話していただきます。それぞれのシンポジストの問題提起やお話から、「食と健康」についてこれまで当たり前と思われていたことをひっくり返すような「気づき」や驚き、発見があれば、そして日常生活での健康不安を考え直すきっかけになればと考えています。

17:45 ～ 19:15

記念講演 今、共に生きるを考える～街・仲間・活動の中から～（仮題）

演者

根本俊雄・荒関繁信・荒関司津（NPO 法人 SAN Net 青森）

見知らぬ青森の地で、精神障害者の居場所づくりを始めた。「NPO 法人 SAN Net 青森」を、8年前の1999年、たった10人から立ち上げた。やがて、障害者が商店街に出ると、いろいろなNPOや商店の人たちに出会った。少しずつ仲間も増え、つながりが広がった。道のりは決して平坦ではなく、紆余曲折、いまだに泣き笑いの連

続である。

私たちの経過を今度刊行されるシリーズ「社会臨床の視界」第二巻『精神科医療治療・生活・社会』を書くことで、あらためて「せめぎあい、共に生きる」ということを考えた。今回、一緒に講演をする、お二人の荒関さんは青森の地に着いて間もなく出会った。「SAN Net 青森」で共に悩み、楽しんできた。隣に住み、一緒に暮らしあっている。荒関繁信さんは自分の生きてきた道のりを語るかもしれない。奥さんの司津さんは何を言い出すか見当もつかない。黙っているだけかもしれない。ぼくはかなりの「共に生きる」を話したいと思う。

19:30～21:30 交流会（八王子セミナーハウス内にて）

6月15日（日）

10:00～16:30（昼食・休憩 12:00～13:00）

シンポジウムⅡ 福祉の現在とゆくえ～特に、国家・公共・共生をめぐる～

話題提供者

竹内章郎(岐阜大学)・脇田諭司(三重県職員)・篠原睦治(和光大学)

コメンテーター

林恭裕(北翔大学)・天野誠一郎(東京・国立市 在宅障害者)・林延哉(茨城大学)

司会

三輪寿二(学会運営委員)・川英友(学会運営委員)

私たちは、シリーズ「社会臨床の視界」第三巻として『「新優生学」時代の生老病死』を刊行しましたが、そのなかでは、多くのことを論じました。このシンポジウムでは、本書が論じた上記テーマに集約される、ひとつの軸を考えます。

すなわち、三人の話題提供者は本書の執筆者です。竹内章郎さんは、人権と平等をめぐる哲学的論考を重ねながら、地域での福祉活動にも従事していますが、福祉国家論の現状を批判しつつも、その改革の展望を探り続けています。脇田諭司さんは、公務員として福祉行政に関わりながら、障害者自立支援法などの課題・問題にぶつかってきましたが、福祉の現在を振り返って、国家と、家族を軸とした親密圏を見つめ、そのはざままで公共圏のあり方を考えています。篠原睦治さんは、「共生・共学」運動に関わりながら、福祉国家の管理・抑圧性を警戒し、家族・地域の課題・問題を見つめて、そこからの「反優生・共生」の可能性を探ってきました。

上記の話題提供を受けた討論は、以下の三人のコメンテーターの意見・感想をはさんで展開することを期待していますが、林恭裕さんは、職業上からも運動的にも「障害」児・者の教育・生活に関わりながら、一方で、大学で福祉専門家養成の仕事をしています。天野誠一郎さんは、地域に暮らす在宅障害者ですが、地域で共に暮らす街づくりに関わってきました。そのなかで、家族、地域、行政との関係を種々様々に体験してきました。林延哉さんは、障害者施設で働いた後、現在では大学で一般企業や教育の現場に出て行く学生たちと関わりながら、誰もが虐げられずに暮らしていける世の中について考えています。フロアーの皆さんからの発言をお待ちしています。

交流会、食事及び宿泊について：

(1) 14日 19:30 より現地にて交流会を予定しています。

参加費は 3500 円となります。当日の参加も可能ですが、準備の都合からは、事前にご参加のご意向をお知らせいただくと幸いです。

(2) 14 日・15 日の昼食は会場の食堂にてお取りいただくことが可能です。

ただし、こちらは人数分を用意させていただきますので、事前にお申し込みが必要となります（一食 700 円）。会場の食堂以外には近隣に昼食を入手できるレストラン・商店等がありませんので、ご予約いただかない場合は、ご持参いただくのが良いと思います。

(3) 今回の会場となる八王子セミナーハウスは宿泊が可能となっています。

宿泊も事前のお申し込みが必要となります。部屋にはシングル・ツイン・複数人部屋があり、応じて宿泊料金が違います。各部屋には大小タオルはありますが、歯ブラシ、浴衣、ドライヤー等は持参する必要があります。

* 上記 (1) 交流会、(2) 昼食、(3) 宿泊の予約は学会にて取りまとめて行います。

10 頁の申し込み用紙をご利用の上、ファックスにて 0480-61-3373 までお申し込みいただくか、同様の内容をメールにて sokai16@sharin.jp までお申し込みください。

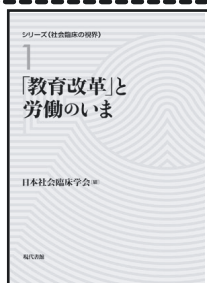
申し込み用紙は交流会・昼食・宿泊共通となっていますので、該当する部分にチェックをお入れください。また、学会よりご連絡をさせていただく場合がありますので、連絡先を必ずご記入ください。

宿泊ご希望の場合の部屋はシングルから順次埋めていく予定にしていますが、ツイン、複数人部屋をご希望の場合はその旨お書き添えください。宿泊料金は部屋のタイプによって変わりますが、約 5000 ～ 7000 円程度になります。宿泊料金についてはお申し込みを頂いてから個別に連絡させていただきます。（なお、当日キャンセルの場合は 100%、前日～7 日前の場合は 20% 程度のキャンセル料が必要となります。）

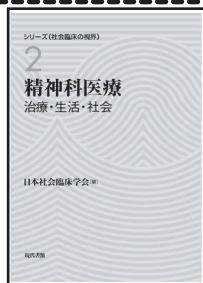
お申し込みの〆切は 5 月 10 日とさせていただきます。

費用については、当日会場にて清算させていただきます。

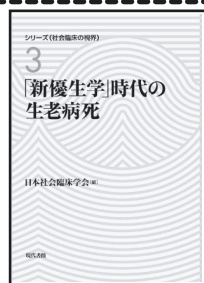
◆日本社会臨床学会 編◆ シリーズ 社会臨床の視界



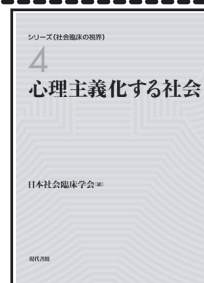
【第1巻】
「教育改革」と
労働のいま
四六判 320頁
3000円＋税



【第2巻】
精神科医療
—治療・生活・社会—
四六判 320頁
3000円＋税



【第3巻】
「新優生学」時代
の生老病死
四六判 328頁
3000円＋税



【第4巻】
心理主義化
する社会
四六判 304頁
3000円＋税

〔シリーズ 全四巻〕

◆第1巻 「教育改革」と労働のいま

- 第一章 「教育改革」を先導する「心の教育」 小沢牧子
- 第二章 公教育のなかの国民支配 池田祥子
- 第三章 「日の丸・君が代」の強制と都立高校改革 岡山輝明
- 第四章 子どものく分別>に向かう学校 岡崎勝
- 第五章 特別支援教育にかかわる臨床現場から 戸恒香苗
- 第六章 「分けるな」をいまこそ 北村小夜
- 第七章 働くことの現在 原田牧雄
- 第八章 大学はいかにあるべきか 林延哉
- 第九章 労働蔑視と教育重視 佐々木賢

◆第2巻 精神科医療—治療・生活・社会

- 第一章 精神医学と社会 石川憲彦・三輪寿二
- 第二章 病院精神医療はどう変わってきたのか 赤松晶子・三輪寿二
- 第三章 薬物療法の問題群 三輪寿二
- 第四章 ビーブルファースト 私たちはまづ人間だ 山本眞理
- 第五章 精神保健と地域論 大賀達雄
- 第六章 街なか「オープンスペース」の八年 根本俊雄

◆第3巻 「新優生学」時代の生老病死

- 第一章 健康義務化社会を問う 山田真
- 第二章 老いと介護、そして尊厳死 高石伸人
- 第三章 親密圏と公共圏のはざまにて 脇田愉司
- 第四章 女性たちは何処へ? 浪川新子
- 第五章 少子化対策と生殖補助医療を考える 福本英子
- 第六章 不妊治療と不妊カウンセリング 小沢牧子
- 第七章 「バック対ベル訴訟」とは何か 秋葉聰・篠原睦治
- 第八章 <対談>「差別・抑圧としての死」を考える 竹内章郎・篠原睦治

◆第4巻 心理主義化する社会

- 第一章 「心理主義」と、その教育への浸透 中島浩憲
- 第二章 社会の心理主義化をどのように捉えるか? 森真一
- 第三章 健康不安の湧出と「癒し」イデオロギー 八木晃介
- 第四章 「ファシズム的な社会」と心理学 三輪寿二
- 第五章 いま、なぜ、「発達障害」なのか、WICS-IIIなのか 篠原睦治
- 第六章 発達論としてのアイデンティティ論 山下恒男

現代書館 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-2-5

電話03(3221)1321 FAX03(3262)5906 <http://www.gendaishokan.co.jp/>

(図書目録進呈)

頑固なれど頑迷ではないオールドボーイ・オールドガール達 ～シリーズ「社会臨床の視界」(全四巻) 刊行に関わって～

菊地泰博・現代書館代表

また、社臨(日本社会臨床学会)の皆様と一緒に仕事をさせていただきました。「また」と言いますのは社臨の会員の方々と仕事をご一緒してから30年以上にもなるからです。現在も社臨の会員で、当時日本臨床心理学会(日臨心)の会員だった、山下恒男さんの『反発達論』の初版が1977年6月、その4年前1973年9月には当時やはり日臨心の会員だった渡部淳さんの『知能公害』が刊行されています。現代書館の創業が1967年ですから会社の歴史は皆様と一緒にあったといっても過言ではないくらいです。

その当時から、今回のシリーズ「社会臨床の視界」(全4巻)編集担当である篠原睦治さん、小沢牧子さんや、執筆頂いているほとんどの方々とお付き合いいただいておりますが、よくもこれほど頑固な人達と付き合えた、自分でも感慨深いものがあります。

お二人をはじめ、日臨心や社臨の方々が、何処の職場や学校でどんな経歴だったかは正確には存じませんが、話の端々、それよりも日臨心の改革やその後の社臨の創立などの実際の行動を見聞きしておりますと、なんて頑固で原則的な人達なんだ、一体この人達はどんな生まれで(出自で人を思うのは如何なものかとは思いますが)、どんな学問をして、どんな思想形成したのか、と興味も感じておりました。多分学生時代の運動ではなく、幼児から青年期にかけての思想形成時、自己と社会の経済問題が思想に転化する時の複雑な生活体験を引きずっている人達なんだろうという思いで、私は畏敬すら感じております。

そんな方々と今回もまた、全4巻という、これまでの社臨の活動の集大成ともいうべきお仕事をさせていただきました。篠原さんから声を掛けていただいたのが2005年4月、4年越しになりましたが何とか間もなく刊行されます。

これまでの日臨心や社臨編集の本は、いつも斯界に一石を投ずる内容でした。それは、思想として原則的で、一貫して差別されている人々から学ぼうとする姿勢のこのような書籍は、他の学会では書けないだろうと思っております。グローバリズムが浸透し、人間の価値の基軸が変わってきている、この時代には、社臨の方々のような考え方を夢想だにできない研究者・実践家が多いのではないのでしょうか。この価値観の激変の時代、頑固に基軸を変えない・変えられない人々、この思想・生き方の頑固さは貴重です。

へそ曲がりというより、皆様と気持ちが通底しあえると信じている私は皆様の頑固さが大好きですし、今回お声を掛けていただいたことに感謝しております。

おそらく私が現役では今回が皆様との大きな仕事の最後になる事でしょうが、今回実質的に編集に関わった新人編集者を私の後任として、この場をお借りして紹介させていただきます。昨年の社臨の総会時も会場でお手伝いさせていただいたそうですが、下河辺明子という若者です。もの凄い頑張り屋です。多分私はその気質を持っていないからでしょうが、私はこつこつと真面目に頑張る人が大好きです。下河辺明子は正にそういう若者です。本人も皆様に信頼される編集者になるべく努力しております。何卒よろしくお願い申し上げます。

第一巻 「教育改革」と労働のいま

子どもや教師、若者から元気を奪う事態が、この10年急速に進行している。その背景には、90年代半ばのころから展開した経済のグローバル化と国家主義の蔓延がある。「心の教育」という名の愛国心教育、日の丸・君が代強制のもとに、学校が閉塞していく。習熟度別学習、学校選択制、特別支援教育のもとに、子どもはさらに分けられて仲間関係を失い、教師や専門家とのタテ関係に閉じ込められていく。教師もまた自身の評価と競争に翻弄される。とりわけ重大なできごとは、1947年に制定されて以来一度も変更が行われなかった教育基本法が、2006年、全国各地の人びとの強い反対の意思表示を無視して、新法に改定されたことである。新法には「国と郷土を愛する」との文言をふくむ徳目が羅列され、国家による家庭教育への介入も懸念されることになった。

2007年に制度化された特別支援教育という名のあらたな特殊教育は、作り出された新しい診断名のもとに子どもをさらに振り分け、地域の子どもたちがいっしょに暮らす場としての学校を許そうとしない。こうして学校にはさまざまな問題が積み重なっている。「子どもを分けるな」という基本姿勢こそが、問題を解く古くて新しい鍵ではないのか。

若者労働の場にも、大きな変化が起きている。1995年に財界から出された提言「新時代の日本的経営」は、労働者を振り分けることで、多くの非正規労働者を生み出した。労働と教育にかかわる政策は、いつも連動しながら変化する。競わされ分けられながら学校生活を終えた若者たちは、こんどはあらたな経済構造のなかで、「エリート」「下積み」を問わず疎外された個人契約体と化していく。

本書はこれらの危うい現状について、教育政策、子ども状況、若者労働の三つの角度から分析し論じ提言する。

(第一巻編集担当 小沢牧子)

第二巻 精神科医療 治療・生活・社会

新自由主義(ネオリベリズム)は、これまで「国家の保護下」にあった医療界に多大な影響を与えている。心神喪失者等医療観察法や障害者自立支援法の法制度から生物学主義的な「急性期医療の充実」という治療方法にいたるまで、新自由主義と不可分に結びついている。精神障害者に対する差別・偏見は温存されたまま、心神喪失者等医療観察法は、社会治安的施策の急進化の一翼を精神科医療に求め、障害者自立支援法は、自己責任化を当然視して地域における精神障害者の生活圧迫を加速化させてきている。そして、急性期精神科治療は人間関係的な関わりを排して身体のみを対象化する生物学主義的な治療へと傾斜していると言えるだろう。

社会治安対策としての精神科医療は「何をしでかすかわからない」精神障害者イメージを不必要に喧伝して国民感情を煽ることで容易に「国家的」「国民的」に成立する。そして、自己責任化は、事情の如何を問わずに働けない者を強力にスティグマ化し、これまで以上のドラスティックな排除のための装置として機能し始めている。

いま、精神科医療は、管理・抑圧批判だけでは済まされない諸課題を呈してきているのではないか。本書は、これまでの精神科医療への批判的言説を含みながら、現代的状況の新たな問題群に目を向けるとともに、それらに対する抵抗の試みや地道な実践を、あるいは紹介し、あるいは模索したいと考え、編まれたものである。

精神科医療における「治療」と精神障害者の「生活」の視界から見えてくる、いまの「社会」の姿は、障害のあるなしを越えた“わたしたちの課題”として捉えるべきものを示しているように思われてならない。

精神科医療の世界は分かりづらいと思われがちであるが、お読みいただければ、そこには“わたしたちの課題”があることをご理解いただけると思う。

(第二巻編集担当 三輪寿二)

第三巻 「新優生学」時代の生老病死

私たちは、「少子高齢化社会」「男女共同参画社会」「健康義務化社会」などと呼ばれる時代に、生まれ、老い、病み、そして死んでいく。本書は、このような社会で、私たちが体験する生老病死の諸相に着目し、それらの問題・課題を論述している。それらの切り口は、健康増進法、介護保険制度、尊厳死・安楽死、障害者自立支援法、胎児診断・不妊治療などである。ここには、健康か病気か、若さか老いか、健常か障害か、有能か無能かなどをさまざまに生きる人々を「生きるに値する生命」と「生きる値しない生命」に仕分けて、それなりに処遇する「社会・人間・生命」の見方・考え方があ

る。すなわち、現代においても、優生思想とその具現が進行していると言える。本書は、20世紀前半に展開した、アメリカの古典的優生施策に関わる事件に立ち寄ったが、それとの対比で言えば、現代の優生施策は医療・福祉サービスになっている側面があるし、それらは商品化すらしている。したがって、私たちは、自己決定・自己責任において、それらを選択して、利用し消費する時代に生きている。本書を『「新優生学時代」の生老病死』とタイトルしたゆえんである。

さて、国民の生存権、幸福権を保障すると約束した福祉国家は、グローバル化した市場経済の勢いと新自由主義体制化のなかで、限りなく後退しているが、本書は、障害者の社会参加、介護の社会化などのなかで、それらのことを検証している。ここでは、ただちに「国の責任」、それと裏腹の「国の抑圧・管理」と「国民ならざる者の排除」が問われてくるのだが、こうして、私たちは、個人、家族、地域、そして国のはざままで揺れ動きながら生きることになり、新たな共同性の創造という課題にも直面している。本書に還流する、もうひとつのテーマである。お読みくださると幸いです。

(第三巻編集担当 篠原睦治)

第四巻 心理主義化する社会

「あなたは絶対に自信がありますか、心の健康に？」

これは厚労省『こころのバリアフリー宣言』(2004年)の言葉である。この脅しともいえる言説が象徴するように、「不健康・不健全」をみつけだそうとするまなざしが教育や福祉などさまざまな領域に広がっている。早期発見・早期治療のかけ声とともに、このまなざしは地域や家庭の中にまで浸透しようとしているのだ。それにともない、精神医学的対応や心理学的対応を受ける人もまた増加しようとしている。文科省は「発達障害」の「児童生徒が約6パーセント程度の割合で在籍している可能性」(『発達障害早期総合支援モデル事業』2007年)があると言い、厚労省も「生涯を通じて5人に1人は精神疾患にかかる」(『こころのバリアフリー宣言』)と述べている。このような行政の姿勢が広がっていけば、「精神疾患」「障害」として医学的・心理学的対応を受ける人々が急増していくのは間違いない。こういった心理主義化の進展ともいえる事態をどう捉えていくのか、それが第4巻のテーマである。

このところ「心理主義」や「心理学化」という言葉がよく使われるようになった。本学会でも2004年の総会で「いま、社会の心理主義化をどう問うか」というシンポジウムを開いている。では、その「心理主義」という用語をどう捉えていけばよいのだろうか。また、心理主義化の背景にある社会の変化をどう考えていけばよいのだろうか。さらに、心理学や精神医学の浸透とともに広がり変化してきた「健康」「癒し」「アイデンティティ」「障害」といった概念をどう問い直していけばよいのだろうか。そういったことを検討する中で、心理的言説や技法の浸透がひきおこす問題を考えていく、それが本巻のねらいである。

(第四巻編集担当 中島浩壽)

日本社会臨床学会第 16 回総会 昼食 / 交流会 / 宿泊申込書

お名前		
ご連絡先	住 所	
	電 話	
	メー ル	
お申し込み内容 ＊お申し込みの項目にチェックを入れてください。宿泊の方も、食事欄・交流会欄に必要な分のチェックを入れてください。		☐ 14 日昼食（700 円） ☐ 14 日宿泊（5000 ～ 7000 円） ☐ 14 日交流会参加（3500 円） ☐ 15 日朝食（500 円） ☐ 15 日昼食（700 円） （上記の他に総会参加費 2000 円がかかります）
その他、連絡事項等		（複数名でお申し込みの場合は、上記に代表者を、下記にその他の方についての上記の情報と同様のものを記載してください。）

宛先： FAX… 0480-61-3373 Mail… sokai16@sharin.jp